一九八〇―一九九〇年ニカラグアにおける サンディニスタ政権下の民衆教育

松久玲子

はじめに

ラテンアメリカにおける識字率をみると、三三カ国中、八〇％以上の国家が一九カ国、八〇％から六〇％が五カ国（ブラジル、エルサルバドル、ドミニカ共和国、ボリビア、ホンジュラス）、六〇％以下が二カ国（グアテマラ、ハイチ）、不明が七カ国となっている。[1] 識字率そのものは、過去二〇年間に一〇％から二〇％の伸び率を示しているが、依然として国家間、都市と農村間の格差は大きい。こうした状況のもとで、識字および成人教育はラテンアメリカ諸国において大きな問題となっている。ラテンアメリカにおいて非識字の意味するところは、政治、経済、社会における権力と資源の不平等な分配の指標とみなすことができる。経済危機や政治的不安定を背景に、一九八〇年代には、ラテンアメリカ諸国で活発なＮＧＯ（非政府組織）の活動が見られた。そうした民衆運動の中で「民衆教育」という概念がしばしばもちいられている。この概念は、ここ三〇年の間に見られた比較的新しいものであり、その分析の枠

組みをめぐっては論議が見られる。本論文では、ニカラグアのサンディニスタ政権下で実践された「民衆教育」を、ラテンアメリカの民衆教育の枠組みの中で考察する。

第一章　「民衆教育」の理論枠組

(1)　ユネスコの教育戦略とラテンアメリカの民衆教育

民衆教育は、ラテンアメリカの成人を対象としたノンフォーマル教育（非公式教育）の分野で形成された概念である。

ラテンアメリカでは、初等教育の普及は比較的たち遅れ、初等教育の不就学やドロップアウトが生み出す成人の非識字の問題は深刻であるが、それに対する政策は十分とは言えない。ラテンアメリカの成人教育は、国際世論の流れのなかでユネスコの影響の下に形成されてきた。ユネスコの教育戦略は、第二次世界大戦後さまざまな修正を加えながらも、基本的には「進歩」と「発展」にたいする教育の役割に疑問をさしはさむことなく、教育を開発の基本的要素として位置づけて来た。成人教育の概念は、ユネスコの教育戦略のなかで基礎教育（educación fundamental）、共同体開発（Desarrollo de comunidad）、機能的識字（alfabetización funcional,）、機能的教育（educación funcional）と変遷をしたが、基本的には開発理論と人的資源論に基づき、各国の経済開発政策に取り込まれてきた。

パブロ・ラタピはラテンアメリカの成人教育の分析で、民衆教育をユネスコの影響のもとで発展してきた既成の成人教育に対立する、ラテンアメリカ独自に形成された新しい概念としてとらえている。[3] 開発理論および人的資源論に基礎をおいた成人教育は、個人を開発の過程に組み入れるための手段であり、フォーマル教育の補償教育として提供

される。一方、民衆教育は、近代化の恩恵から取り残された周辺部の人々を対象とし、それらの人々の主体的政治参加の方向づけをもつ。したがって、教育は個人レベルの教育の達成を中心的関心におくより、集団として政治的参加、組織化を課題とし、それを通じた政治、社会構造の変革に高い関心を示す。大多数の周縁化された民衆を対象とし、社会構造の変革にかかわる広範な運動を達成するための教育実践を民衆教育と呼ぶが、この民衆教育の概念をどの範囲の教育実践にまで適用するかは、研究者のなかでも一致していない。ラタピは、前述のようにユネスコの教育戦略の批判としてラテンアメリカで形成された教育実践、つまり一九六〇年代から一九八〇年代の政治的抑圧と経済危機を経て、開発主義批判として従属理論に基礎をおいた教育運動をその対象としている。

一方、C・Aトーレスはキューバ、ニカラグア、グレナダなど、社会主義の政治的方向性をもち階級による集団的参加を基盤とした国家の教育政策を分析対象とし、そのなかの広義の成人教育を民衆教育ととらえている。[3] トーレスによれば、ノンフォーマル教育は社会変革の過程で多くの役割を果たして来た。まず、成人教育は民衆の政治文化の変換に付随して来た。研究者は、ノンフォーマル教育を革命政府の教育変革の重要な道具のひとつと見なしている。成人教育は新たに形成された国家の社会的、政治的正当化の有力な道具として標的を定められた。ラテンアメリカのノンフォーマル教育の変形である民衆教育は、社会変革と密接に関係した、社会の最も貧しいセクターの要求と必要に応える新しい教育のパラダイムとして認識された。しかし、トーレスの分析の枠組みでは、時代と地域を問わず、ラテンアメリカ地域をこえた社会主義的方向性をもつ社会変革のための教育政策をすべて含みうる。その場合、ラテンアメリカの草の根民衆運動レベルでうまれた教育運動のもつ意味とその教育方法論の特殊性を見逃す恐れがある。

本論文では、民衆教育をラテンアメリカの地域性と歴史性のなかからうまれた教育実践として規定し、その教育方

法論が社会変革のなかでどのような意義を持つのかに論点をおきたい。ラタピ、トーレスの両者に共通する点は、民衆教育をノンフォーマル教育あるいは広義の成人教育の枠組みの中でとらえながらも、ユネスコの機能的教育に代表される開発に個人を統合する補償教育としての従来の成人教育の枠を超えた政治、社会構造的側面からとらえ、民衆運動と密接に関係した政治的方向づけをもつ成人教育として民衆教育を位置づけている事である。さらに、民衆教育を従属資本主義に規定された社会の構造変革をめざす教育運動という枠組みでとらえている。民衆の政治参加が必ずしも定着していないラテンアメリカにおいて、トーレスが論じているように「内容としての民主主義」つまり参加民主主義への貢献が、民衆教育を分析する上での、基本的な柱となろう。

(2) 民衆教育のラテンアメリカにおける地域的特質

民衆教育は、一九六〇年代から七〇年代にかけての軍事政権、独裁政権の抑圧政策や経済危機を背景に、民衆運動の形成の過程でうまれた。七〇年代以降の民衆運動に関しては大串[4]が概括しているが、その特徴として共同体志向、底辺民主主義と国家、政党、外部の支援団体にたいする運動の自律性の三点を上げている。その活動は多岐にわたり伝統的な農民運動、労働運動に加えてキリスト教基礎共同体の運動、都市の住民運動、女性解放運動、政府の抑圧に抗議する運動などが展開されている。その運動主体は、小規模農民や農業労働者、都市の貧困層など、資本主義と近代化の恩恵から排除されている周辺部の人々である。その運動のなかで、貧しい人々の救済活動、識字教育プログラム、女性の地位の向上や家族の問題に取り組むプログラムが提供されてきた。大串は、それらの社会運動、ここで言う民衆運動の意義について幾つかの示唆を与えている。

一、社会運動に参加する事は、運動への参加者の視野を広げ、意識化や主体としての能力向上に大きく貢献する。

二、社会運動の新しい志向は、たとえそれ自体がただちに国家権力のレベルでの変革をもたらさないにしても、日常生活のレベルで疎外を克服して新しいアイデンティティーを形成し、水平的・平等な関係を作り上げることによって、新しい政治文化の基礎となる。

民衆教育は、こうした民衆運動における社会関係の民主化と個人の意識化と能力の開発において運動内部で独自の方法論を編み出し社会運動に貢献してきている。

民衆教育の方法論は、パウロ・フレイレの教育論の影響を大きく受けて形成された。民衆教育のプログラムにおいては、参加者の抱える現実の生活における問題が提起される。そして、それらの問題を参加者が話し合う中で、それが社会構造に根差した共通の問題として認識される、つまり集団的対話（討論）による参加者の意識化が行われる。この過程は、識字教育や成人教育においても同様であり、文字を獲得するこの意味、学ぶ意義が認識された後、学習に入る。この討論を通じた過程で、学習者と教授者の関係は、知識の伝達という垂直的な関係ではなく、さまざまな経験をもつ対等な人間として対話による水平な関係が構築される。教師は、知識の伝達者としての専門職である必要はなく、民衆組織のリーダーが教師となる。そして、教師の活動を、教材や方法論の面で、教会や大学、ＮＧＯの民衆教育センターが支えている。民衆教育の内容は、常に民衆の現実から出発し、民衆運動のなかでの参加研究法により作られる。そして、民衆教育の過程で人々が社会構造のなかでの民衆のおかれている政治的、経済的に疎外されている現実を認識し、主体化することにより、現実を変革する行動へと自らを導く。民衆教育は内容としての民主主義にかかわる教育といえよう。

次に、ニカラグアにおけるサンディニスタ政権下の識字運動および成人教育において、民衆運動の担手と教育運動との関係、民衆教育の方法論の変化と参加民主主義の関係、さらに革命政府により権威化された民衆基礎教育の意味を考察する。

第二章　ニカラグアの識字運動

(1)　ソモサ政権下の成人教育

①　ソモサ政権下の教育構造

ニカラグアの経済構造は、伝統的に綿花、穀物、コーヒーを中心とする従属的輸出農業経済に特徴づけられる。一九五〇年代に朝鮮戦争の影響で、ニカラグアに綿花ブームがおこり、それをきっかけにアメリカ合衆国への経済的従属が加速した。この時期に土地の集中化が進み、ミニフンディスタ（零細な自営農業者）が賃金労働者化することにより、農業労働者層が拡大した。ソモサ政権は、人口の五％が国家収入の五〇％以上を占有するという極度の富の偏在に特徴づけられていた。農村の貧困は特に厳しく、農業労働人口の二〇％は土地なし農民で、約五〇万人の人口が綿花、コーヒー、砂糖などの季節労働に従事していた。一般に民衆の教育意欲は乏しく、特に農村では労働者が熟練を必要とせず、読み書きを学ぶ時間は労働時間を奪われると感じていた。こうした従属的輸出農業においては、基本的に熟練労働者は不必要であり、教育は、大多数の民衆のための初歩的教育と少数のエリートのための教育に二極分化していた。

一九六三年の中米市場へのニカラグアの加入は、市場の拡大とともにアメリカ合衆国の企業による土地、工場の

占有を増大させた。市場の拡大と北米企業の進出による開発の促進は、技術レベルでの、ある程度の人的資源の養成を必要とした。それまでほとんど顧みられなかった農業、工業分野での中等レベルの教育機関が、北米の対外援助法のもとでつくられ、初等教育、成人教育は放置されたまま、中等教育への教育投資が行われた。初等教育では七歳から十二歳の登録者の割合は一九六七年では八〇・九％、一九七四年には八八・〇％になっている。しかし、初等教育第一学年の段階での中退率は、一九六七年には七一・三％に達していた。また、ユネスコの統計によれば、一九七一年の二五歳以上の人口のうち五三・九％は不就学、四一・八％は初等教育未修了となっている。非識字率は一九七九年で五〇・三％、農村では七五・四％に達し、初等教育はほとんど放置され、それが非識字の温床となっていた。

ニカラグアにおいて、遅ればせながらユネスコを初めとする国際世論を背景に、北米のベイシック・ヒューマン・ニーズに基づく対外援助法の影響下で初等教育が取りくまれ出したのは一九七〇年代に入ってからだった。全国教育計画が作られ、初等学校の増設と教員養成が立案された。しかし、この政策は一九七二年のマナグア地震で実行されずに終わった。ニカラグアの教育構造は、大多数の民衆の教育をなおざりにしたまま、アメリカ合衆国の影響のもとで進められ、その教育構造は、経済的従属構造に規定されていた。

②　ソモサ政権時代の民衆教育

ソモサ政権下では成人教育はほとんど顧みられなかった。政府は一九七五年－一九八〇年の農村開発計画において、読み書き、計算を中心とした伝統的成人教育である識字教育と、技術、行政上の人材養成を目的とした開発主義的教育プログラムを立案した。成人教育機関として夜間学校ＣＥＤＡが設立されたが、一九七七年には学校数

六三、教師数四一九人、一六、五六人の生徒がいた。また、全国で七〇の労働者センターがあり一六二人の教師と五、六七二人の生徒が参加していた。その他、農牧畜学校が設立された。また、農村開発プログラムが実施され、教育省の管轄のもとに二三、二六七人の生徒、六六〇人の教師が存在し、一四七の学校が運営されていた。[6] しかし、一九七一年のユネスコ統計では一五歳以上のうち約四一万人が非識字者であり、一九七九年当時の十歳以上の人口の非識字率が五〇・三%であった事を考えると、規模的にも到底不十分なものだった。

この時期、サンディニスタ民族解放戦線（FSLN）がその解放区において教育活動を進めていたことが知られているが、それ以外で一般の成人教育を担っていたのは民間機関であり、全国で二〇の機関が活動していた。このうち五〇%は宗教関係であり、二〇%は権利要求と結び付いた民衆組織だった。当時のニカラグア政府によって放棄されていた教育の部分を教会が担っていたと言えよう。このなかで七〇%が伝統的な識字教育をやめ、問題提起的な内容を重視している。特に、そのうちのCENEA（全国成人教育センター）やCEPA（農業教育促進センター）はフレイレの教育方法論を採用していた。CEPAは、一九六九年に解放の神学派の神父により農村の伝道プログラムのリーダー養成のため作られたが、その後聖書と農業技術のトレーニングのためのワークショップが開催された。このセミナーの参加者が他のカトリックの運動の参加者に呼びかけ、農業労働者同盟（ATC）が組織され、反ソモサ運動を担う有力な組織となった。また、学生運動もFSLNを支持し、キリスト教系の学生は、解放の神学の基礎共同体活動に参加し、FSLNの反ソモサ運動を背後から支援した。

一九七九年のニカラグア革命は、FSLNを中心勢力としながらも、それを支援した広範な草の根民衆組織を反ソモサ運動に統合できた事が成功の一因となっている。反ソモサ運動のなかで、それを担う草の根組織の形成の過

程で民衆教育の芽が育っていたと言えよう。その中でも解放の神学派が与えた影響は大きく、教育の分野でも国家再建政府で文化相として解放の神学派の神父E・カルデナルが、そして識字運動の責任者としてF・カルデナルが登用された。

(2)　全国識字運動（Curuzada Nacional de Alfabetización）

一九七九年七月、ソモサ政権を打倒したFSLNは、その六カ月後の一九八〇年三月二四日から五カ月間にわたり全国識字運動を展開した。この識字運動は、キューバ、ギネアビサワ、モザンビークの識字運動の経験そしてUNESCO、OEA、パウロ・フレイレ等の助言を受けながら、独自の教育運動を形成した。(7)

①　識字運動の目的

サンディニスタ臨時政府は、大多数の国民の非識字状態を「ソモサ政権の残酷な遺産」であり、ソモサ政権下の教育は労働、社会関係、支配者の文化やイデオロギーを再生産するためのもので、非識字は搾取の構造を維持するために維持された現象であると位置付けた。識字運動は十歳以上のニカラグアの非識字人口を対象として彼らが読み書きと簡単な計算能力を身につけることを目的としたが、それ以上に「政治的要素をもった教育行為ではなく、教育的要素をもつ政治行為である」とサンディニスタ政府は述べている。(8) サンディニスタ政府は、革命による社会変革のプログラムを遂行する手段として、教育の役割を認識していた。識字運動は、サンディニスタ政府の志向する革命の方向づけをもつ社会変革のための運動として明確に位置づけられ、読み書きを学ぶことを通じ、国民がニカラグアの現状を理解し、社会変革を担う「新しい人間」を形成することを目的としていたのである。

② 識字運動の組織と運営

ニカラグアの識字運動は、ラテンアメリカのさまざまな教育運動の要素を取り込んで組織された。サンディニスタ国家再建臨時政府は、識字運動の開始にあたりソモサ政権崩壊直後に、大規模な識字運動を経験し民衆の識字率の向上をおさめたキューバに代表団を送った。一九七九年八月、キューバの教育使節団が首都マナグアを訪問し、臨時政府との間で教育援助が取り決められた。キューバにニカラグアの識字運動を援助するための教育センターが設立され、ニカラグアからの教育用員を養成すると共に、キューバ国内のニカラグア派遣人員の訓練が行われた。一九七九年九月から二年間の任期でキューバから二〇〇〇人の教師が派遣され、さらに一九八一年に第二次の二〇〇〇人が派遣されている。(9)

ニカラグアの識字運動は、組織構造とその運営のかなりの部分においてキューバの識字運動を継承しているが、以下の四点に類似性をみいだすことができる。第一に、識字運動は社会、政治性をもつ社会変革のための運動と位置づけられた。第二に、識字運動は民衆動員の方法として革命を支えた民衆組織を通じて行われた。ニカラグアでは反ソモサ運動を支えた広範な民衆組織とFSLNの下部組織が識字運動を支えた。全国識字調整委員会（la Coordenación Nacional de Alfabetización）が設置され、委員長としてF・カルデナル神父が任命された。その下部組織として全国識字委員会が地方、地区レベルでつくられた。これらの組織の担い手となったのが、FSLN、サンディニスタ防衛委員会（CDT）、サンディニスタ労働者センター（CST）、七月一九日サンディニスタ青年隊、ATC、ニカラグア教員組合（ANDEN）、ルイサ・アマンダ・エスピノサ女性連盟（AMNLAE）、カトリック教会、ニカラグアカトリック教育者連合、放送学校、ニカラグア新聞記者組合、サンディニスタ民衆軍

などのＦＳＬＮの下部組織および民衆組織であり、それに教育省、農牧業開発省などの政府機関が加わり、計十八の組織が参加した。

第三に、識字運動の組織構造とその運営においてキューバの識字運動が踏襲された。まず識字運動のために、十歳以上の人口を対象に全国の非識字者の調査が実施された。この調査は、ＡＭＮＬＡＥなどの民衆組織が担当し、面接調査が全国隅々で行われた。この結果、人口の五〇・三％が非識字者であり、その二一％が十歳から十四歳の年齢層に集中しており、都市と農村、太平洋岸と他地域との差が大きいことがわかった。識字運動の準備段階であるパイロット計画の中で、指導書「民衆の夜明」（Amanecer del Pueblo）が作成された。同時に、識字指導者の養成が行われた。十五日間の講習会で識字教師の資格を授与できる八〇人のチームが作られ、このチームが他のチームを作る方式で一二、〇〇〇人の教師が誕生した。学生、教師を中心にこの方法で指導者が養成された。一九八〇年三月十四日から二三日までに、全国で七〇〇〇の講習会が開かれ、一七五、〇〇〇人の指導者が養成された。

識字運動では、全国を都市と農村に分け、両地域を組織毎に担当した。参加者は、民衆識字指導者（Alfabetizadores Populares）、民衆識字軍（Ejército Popular de Alfabetizadores）、識字労働者軍（Milicia obrera de Alfabetizadores）の三つのグループに分けられた。民衆識字指導者として、ＡＭＮＬＡＥやＣＤＴを組織基盤として集められた主婦、労働者、公務員などの遠隔地での活動が難しい自主参加者が都市地域で活動した。識字労働者軍は都市労働者の班で構成され、職場の非識字者の教育を担当した。その組織基盤は、ＣＳＴで山岳地帯での活動に従事する班もあった。これらの識字教育は、職場や家庭で毎日仕事後の二時間を割いて、ボランティアの指導者たちにより実施された。

民衆識字軍は、中等学校生徒、大学生、教師がＡＮＤＥＮ、サンディニスタ青年隊を通じて組織され、五カ月間、農村、山岳地帯に住み込み識字教育活動を行った。かれらは、ブリガディスタと呼ばれ、文盲との戦争に参加する軍隊に見立て、六つの戦線に分かれ大隊、部隊、班に組織された。三〇人づつの班が各地区に配属された。教育水準と訓練レベルの多様な識字指導者による識字クラスの水準を維持するため、毎週土曜日に学習会が行われ、各地区に配属された教育専門家からなるコーディネーターの指導を受けながら活動が行われた。この他に、農村労働者組合を母体とする識字軍、ＡＮＤＥＮの教師やキューバ、コスタリカ、諸外国のボランティア教師からなる「赤と黒」部隊が、農村の識字教育にあたった。四〇六、〇五六人が読み書きを学び、九五、五八二人のブリガディスタが参加した。

第四に、識字運動自体が、革命を担う新世代のイデオロギー教育の役割をもっていたことである。都市の生活しか知らない中学生以上を中心とした若い世代が農村の貧困を肌で感ずる事により、ニカラグアの抱える問題を認識する。また、地方の文化を知り、互いに交流することで認識を深める事が目的のひとつだった。[10] 加えて、地方文化の掘り起こしが識字運動の活動に加えられていた。これはフレイレの課題提起型識字教育の方法論を組み立てるうえで重要な要素をもっている。

以上のように、ニカラグアの識字運動はキューバの識字運動を形態を踏襲しながら、反ソモサ運動に結集していた民衆組織を識字運動の過程でＦＳＬＮの政治方針のもとに再編した。しかし、キューバの識字運動に見られなかったものとして、教育内容と方法論の独自性を指摘する事ができる。

③　教育内容と方法論

全国識字運動では、識字のための教科書として「民衆の夜明」と識字教師のための指導要領「サンディニスタ教育手帳」が作成された。「民衆の夜明」は、二三課から構成されている。各課には、まず写真が配置されそれに関する短い文が提示されている。この文の中から、民衆の生活と密着し文字を学ぶための基本的音声単位を構成する生成語が取り出される。この生成語のなかから音節が選ばれ、その音節を使って音節の結合と言葉の形成を学ぶ。次に、学んだ言葉のなかから書き取りと学習の確認をして、最後に冒頭のテーマに関する読みの練習で、各課が構成されている。

各課で取り上げられたテーマと写真は、革命の政治的テーマが中心となっており、識字指導者と学習者の対話をひきだすきっかけとなっている。このテーマにかんする一時間程度の集団討論を行うよう指導要領で指示されている。この対話を通して学習者の経験を知り、同時に写真にコード化したテーマについて政治的概念を明らかにし、それを学習者が自分の体験に基づいて自分の言葉で表現する。

以上のように、教科書の構成、集団討論による学習者の意識化の方法など、識字運動の方法はフレイレの方法論をかなりな部分踏襲している。しかし、フレイレの方法論によれば、集団討論のテーマは、人々の生活に密接に関係したテーマが選ばれ、その中から生成語が引き出される。ニカラグアの識字運動では、生成語と生成テーマはあらかじめサンディニスタ政府によってつくられた政治テーマが与えられた。革命直後のニカラグアでは、個々人の識字への動機づけは革命遂行のための政治意識の形成のなかで要求され、民衆の組織化と政治参加を達成することが急務だった。しかし、こうした性急さは一部で反発を招き、特にスペイン語を話さない少数民族の存在する大西洋岸で分離主義や独立運動を引き起こす原因のひとつとなった。一九八五年、サンディニスタ政府は、大西洋岸の

少数民族のための土着言語による識字教育を開始した。

サンディニスタ政権の識字運動は、きわめて政治性の強い教育運動であったと言えよう。新しい政治体制を維持し、国民の意識改革を識字教育を通じ短期間で行うために、すでに同じ経験をもつキューバに範を取った。しかし、一党独裁の社会主義を選択せず、複数政党を認め、参加民主主義を建前とするサンディニスタ政権は、フレイレの民衆教育の方法論を選択した。教育を国家のイデオロギー装置として利用する教育体制と自律的な教育運動の側面をもつ方法論を採用した識字教育は、課題提起型の教育の中で、その方法において矛盾を露呈せざるをえなかった。民衆の自発的課題設定から始めるべき所に、政府の意図的な政治メッセージを注入した。このことが、国民の一部の中にサンディニスタ政府の教育に対する、根強い不信感を生み出した。

一九八〇年八月、サンディニスタ政府によるニカラグアの識字運動は成功裏に終了した。この段階で、非識字率は五〇・三%から一二・九六%に減少したと発表され、世界の識字撲滅に協力したことによりユネスコの表彰を受けた。

第三章　民衆基礎教育

一九八〇年八月に終了した全国識字運動は、その後識字運動の継続期間（一九八〇年八月から十二月）を経て、成人教育のための民衆基礎教育（Educación Popular Basica）として成人教育局のもとで一九八一年から再編された。さらに、一九八五年から学校教育の中に識字運動のなかで開発された民衆教育の方法を取り入れることが決定された。

次に、識字後の成人教育を検討する事により、ニカラグアの民衆教育の問題点を明らかにする。

(1)　民衆基礎教育の組織と構造

民衆基礎教育は全国識字委員会の組織を受け継いだ民衆教育共同学級（Colectivo de Educación Popular、以下CEPと略す）とCEDAにより担われた。成人教育を担うこの二つの機関の生徒数の推移は、表1に示す通りである。CEDAは一九七三年に設立された成人教育機関で革命後も引き続き成人教育を担当した。教師は専門職であり、CEPとは異なる既成のカリキュラムと教育方法で行われた。一九八七年でCEDA生徒一九、六七四人中一、〇〇四人が農村出身であることからもわかるように、都市を中心とする成人教育機関である。

表1　1979－1988年度成人教育生徒数

年　度	全生徒数	農村地域生徒数	識字教育	民衆基礎教育	CEDA	その他
1978	10,463	368	－	－	10,463	－
1979／80	18,137	134	－	－	18,137	－
1980／81	172,389	115,507	46,517	97,299	28,573	－
1982	170,410	114,194	50,945	97,424	22,041	－
1983	187,856	116,138	61,167	105,041	21,650	－
1984	143,360	92,799	41,371	87,919	14,070	－
1985	114,784	71,886	30,721	73,444	10,619	－
1986	120,851	71,663	35,006	64,924	17,692	3,229
1987	118,312	69,644	32,931	59,772	19,674	5,935
1988	83,797	42,739	22,113	35,167	20,983	5,634

出所：Arrien, Nicàragua：Diez años de educación en la revolución, p.448

一方、CEPは無償の、非専門職教師が実践する成人教育である。CEPのための教育施設を特別につくらず、職場や「民衆の組織を育成するために、現実の状況やテーマが集団的に分析される場所や時間はすべて民衆教育の学校」となった。各CEPには七人から十人程度の学習者が参加した。民衆教師たちは、毎日二時間の活動を、土曜講座で指導を受けなが

ら無償で行った。一九八四年の統計では、一七、四二八のCEPがあり、そのうち農村では一二、八一九、都市では四、六〇九のCEPが活動していた。

成人教育は、識字教育と識字後の民衆基礎教育からなる。民衆基礎教育のプログラムは、一学期が六カ月で、二年間で初等教育に相当する四レベルを修了する。一九八四年から六レベルになり、卒業後は技術教育や中等教育レベルの成人教育を受ける事ができる。また、こうした定型的プログラムとは別に、現実の問題に対応するためのプログラムも実践された。一九八三年から一九八六年に行われた売春婦再教育プログラム、農業組合の女性リーダー養成プログラム、農業協同組合の識字コースなどである。

サンディニスタ政府は、民衆教育の特徴として次の点をあげている。[11] ①教育プログラムは、ニカラグアの革命と現実に密接に関係している。「革命自身が教育」である。②民衆教育では、対話に基礎をおき、すべての人々が学びすべての人々が教える積極的参加が不可欠である。③現実の生活から出発し、問題を把握し、現実を変革する教育過程である。④民衆組織を育成し、民主主義への参加をうながす事が民衆教育の目的である。⑤労働と教育との結合。四学年までは、読み書き、算数が中心、五、六学年では技術、農業教育が中心となる。

ニカラグアの成人教育は識字運動を境に飛躍的に増加した。しかし表1に見られるようにその生徒数は一九八三年を頂点に次第に減少の傾向を示し、一九八八年には最盛時の四五%になった。これは、非識字者が減少したためではない。識字運動終了時に十三%であった非識字率は、一九八八年には二〇%に上昇したと報告されている。識字運動に参加した四分の三は、成人教育プログラムに参加していないという結果が出た。特に、農村部での参加者の減少が著しい。またCEPを中心としていた成人教育は、一九八五年以降、次第にCEDAによる成人教育に比重が増して

来た事が生徒数の推移からみてとれる。民衆の組織化と参加を民衆教育の目的とした成人教育は、さまざまな問題をはらんでいた。

(2)　民衆教育の問題点

一九八七年三月、識字後の教育に関するセミナーと討論を基礎にそれまでの識字運動の総括が教育省成人教育局から出された。[12] その総括では非識字率の上昇の原因として小学校の学校数の絶対的不足があげられている。農村の学校の二五％が六学年に満たない不完全小学校で、第一学年のドロップアウト率は五〇％に達している。さらに内戦による学校破壊が追い討ちをかけている。報告書では、民衆教育プログラムの問題点として次の点を挙げている。①教育内容と教材が画一的である。②教師の訓練が不十分である。③教育プログラムが現実の必要よりカリキュラムを重視している。④ＣＥＰの民衆組織を巻き込む教育運動としての性格が減退した。以上の問題解決への提言として、①地方の現状にあった教育内容をもつ教育計画とカリキュラムをつくるため、民衆教育を地方分権化する。②教師の技術的側面の強化と社会分析、批判的能力の育成。③民衆組織の教育への広範な参加をあげている。

一九八八年には、ＵＮＥＳＣＯとの共同研究による農村における成人教育の提言が出された。[13] 内容は、前年の報告書とほぼ同じであるが、特に注意すべき点は成人教育のための教員養成コースを設置しないことを明記している点である。成人教育の中心は専門職ではない民衆教師であり、民衆教師は教育システムにおける政治的、教育的前衛と位置付けられている。さらに二つの提言に共通するのは、民衆教育の方法論をさらに強化する形での見直しが行われている事である。民衆教師による伝統的教育の転換、現実を変革する課題提起型の教育の強調、そのためのカリキュラ

ムの再編、さらに、教育を民衆運動のなかに位置付け民衆組織の広範な参加を民衆教育の前提としている。

以上のサンディニスタ政府の教育省の総括を踏まえながら、現実のニカラグアの民衆教育の実践を教育内容、教師、民衆組織の側面から考察する。

① 教育内容と教材

まず、一九八〇年の識字運動とその後の民衆基礎教育に使用された識字教科書「民衆の夜明」に関して見ると、一九八〇年から一九八九年の間に三回の改訂がされている。各課毎に写真あるいはスケッチとその内容に基づくテーマが示され、それに基づく集団討論が行われる。例えば第一版の一課では、サンディノの写真が掲載され「サンディノ革命の道しるべ」というテーマが書かれている。このテーマから生成語La Revolución（革命）が選ばれる。次に生成語から音節a e o u i が取り出されそれに基づく文字の練習、読み書きの練習が行われる。フレイレの識字教育に基づく一連の学習過程は「民衆の夜明」すべてに共通している。しかし、フレイレの教育方法論の根幹にかかわる生成語とテーマに関しては、「民衆の夜明」では地域に密接に関わるテーマおよび生成語ではなく、全国共通のものとなっており、特に表2に示すように第一版、二版[14]では政治性の強いものとなっている。一九八九年の第三版では政治的要素が後退し政治的テーマにかわり写真と生成語のみが示されている。

民衆基礎教育では、国語、算数、理科、社会の四科目が設置されている。次に、それらの教科書を見てみよう。国語は、第一レベルでは書き取り、簡単な作文などが中心で、レベル毎に次第に講読、作文の程度の高い学習へと進む。教科書の構成は、識字教科書に準じ、二〇課からなる各課にテーマとスケッチが提示され、討論を始めるきっかけとなる幾つかの質問が書かれている。次に、テーマを説明する簡単な講読文が載せられている。第一レベルの教科書で

表 2　識字教科書における各課のテーマと生成語

I「民衆の夜明」1980年

課	テ　ー　マ	生 成 語
1	サンディノ：革命の道しるべ。	la Revolución
2	カルロス　フォンセカは言った：	Fonseca
	サンディノは生きている。	vive
3	FSLNは民衆を解放に導いた。	liberación
4	ゲリラは人殺しの警備隊に勝った。	genocida
5	民衆は蜂起した。	popular
		masa
6	サンティニスタ防衛委員会は革命を守る。	Sandinista
		Defensa
7	少ない浪費、資源の節約、多くの生産は革命の遂行。	poco
		mucho
		hacer
8	労働者革命組織は生産を向上させ、革命の過程を見守る。	trabajadores
		vigilan
9	民衆、軍隊、団結は勝利の保証。	Ejército
10	農地改革は民衆のために土地からの生産を取り戻す。	recupera
		tierra
11	組織と労働と規律でサンディノの祖国を再建を達成しよう。	llegaremos
12	1980年　非識字との戦の年。	analfabetismo
		guerra año
13	もう帝国主義の略奪は終わった。天然資源は我々のもの。	saqueo ya
14	ソモサの企業の国有化は、我々の富を取り戻し経済を強化する。	nacionalización
15	労働はすべての民衆の権利と義務である。	trabajo
16	革命政府は人々のために保健センターを増設し拡張する。	pueblo amplía
17	すべての人々の参加で子供のための健全なレクリェーションを開催しよう。	tendremos
18	住居の自力再建と改善のため隊を組もう。	brigadas

19	女性は常に搾取されて来た。革命は女性の解放を可能にする。	explotada
20	革命は大西洋岸地域に統合への道を開く。	integración
	クリンワスは航行可能な川である。	Atlántico
21	我々の民主主義は組織された民衆の力である。	democracia
22	民衆の利益を守るすべての教会に親交の自由がある。	iglesias
23	サンディニスタ革命は全諸国民との友好的な結びつきを強める。	fraternales

II　新「民衆の夜明」1982年

1	サンディノ：革命の道標。	la Revolucion
2	FSLNは闘う。	lucha
3	若者は闘いを生き抜いた。	chavalo
4	7月19日万歳！	julio
5	赤と黒の旗が白の旗を奪還した。	roja
6	女性は武器を持って闘った。	mujer
7	大衆が闘いを遂行した。	masa
8	ソモサ時代、我々は果てしない夜に生きていた。	noche
9	サンディーノは侵略者たちにノーと言った。	Sandino
10	多くの国々が我々への連帯を表明した。	países
11	多くの殉教者が祖国のために生命を捧げた。	mártires
12	銃は抑圧に対する我々の返答であった。	fusil
13	カルロス・フォンセカ・アマドールはFSLNを創設した。	Fonseca
14	サンディニスタ人民軍とサンディニスタ人民義勇軍は革命を防衛する。	Ejército
15	我々の意識的労働で革命を防衛する。	trabajo
16	革命の警戒は全員の仕事である。	vigilancia
17	革命政府は人民の利益を守る。	gobierno
18	人民保健活動は衛生を向上させ、人民の健康を守るために行われる。	higiene
19	識字学習用テキスト［人民の夜明］は、第二の解放の手段である。	Cartilla
20	我々の革命は、同志人民・諸政府の援助を得ている。	ayuda

21	砂糖・綿花・コーヒーは、外貨獲得のための主要産物である。	azúcar
22	帝国主義の略奪はもう終わった。天然資源は我々のものだ。	riquezas
23	子どもは革命の宝だ。	niño
24	キリスト者は闘いに加わり革命の前進を守り続ける。	sigue
25	グェグェンセはニカラグア文化の象徴である。	güegüense
26	シロネムとは我々の先祖にとってとうもろこしの女神を意味していた。	Xilonem
27	革命はミスキート、スモ、ラマ、クレオールらを革命過程に組み入れる。	miskitos
28	サンディーノがはじめて農業協同組合を設立したウィウィリで、革命政府は農地改革の最初の証書を授与した。	Wiwilí

出所：牛田、1989　p.64-65

Ⅲ「新しい夜明け」1989年

導入	教育	educación	11	監視	vigilancia
1	若者	chavalo	12	豊かさ	riqueza
2	健康な	sano	13	少女	niña
3	権利	derecho	14	デング熱	dengue
4	国	país	15	衛生	higiene
5	女性	mujeres	16	援助	ayuda
6	みんなできる	todas podemos	17	教科書	cartilla
7	労働	trabajo	18	グェグェンセ	güegüense
8	コーヒー	café	19	シロネム	xilonem
9	参加	participación	20	ミスキート	miskito
10	綿花	algodón	21	ウィウィリ	wiwilí

下線部は生成語、スペイン語の下線部はその課で学習する音節

は、テーマの中から幾つかの生成語が選ばれ、音節による文字の学習と学んだ音節を使った言葉の学習がなされる。第二レベル以降では、読んだ内容に関する質問にたいして答えを作文する練習が組み込まれている。第一レベルの国語教科書の二〇のテーマと講読のうち、十課は革命、サンディニスタ政府の政治的姿勢を示す内容となっている。[15]

理科の教科書も同様に、まず学習するテーマにそった写真が掲載されている。学習者の経験や知識を引き出すための対話を通じて、学習内容と学習者の現実とを結び付けるよう指示されている。学習が「現実を改善することを理解」した上で、各課の学習に入る。例えば第六レベルの教科書は、六課からなり、一課から三課までには、農業生産に関する学習、四課から六課までは人体の仕組みに関する学習となっている。一課のテーマは、「丈夫で生産性の高い作物を植えよう」で、この課は「我々の土地を肥やそう」、「害虫から作物を守ろう」という二つのサブテーマから構成されている。各テーマ毎に植物の部分名称や成長のしくみ、肥料との関係、実際の肥料の使用方法、害虫の種類、駆除の仕方、殺虫剤の使用法が学習される。四課のテーマは、「献血は生命を救う」とありこの課では人体のしくみを学習する。[16]

社会は最も政治性の強いものとなっている。他の教科同様にスケッチとその説明文があり、そのテーマに沿って、学習者は討論をする。「しなければならない最も重要な活動は、学んだ事に現実とわれわれの経験を関係づけて、すべての同志の間で討論を行い、歴史的過程と現在を比較し、革命の光で歴史的事実を分析し解釈することである。」と述べられている。[17] 算数に関しては、計算の仕方が学習の中心である。[18]

さらに、成人教育のなかで各共同組合、民衆組織の活動のために作られたプログラムがある。これらのプログラムでは、組織の活動とより密接な関係をもったテーマが選ばれ、そのテーマに沿って作成された教科書は具体的で学習

者の生活と密接な関わりをもつものが多い。例えば、女性の意識化をテーマとした「農村の女性」は、厚生省（MINSA）、全国農牧業組合の婦人局、AMNLAE、女性研究所（INIM）、農業改革研究所、ATC婦人局の協力で作成された。MINSA、ATC、INIMにより作成された「下痢との闘い」、農業共同組合の活動に関するパンフレットなど学習者の討論を通じ具体的な生活の場での必要に答える内容となっている。[19]

すべての成人教育において学習者の経験を掘り起こす集団討論と学習が密接に結び付く方法が取られている。しかし、全国レベルの基礎的な教科書、特に識字教科書、国語、社会では一般に政治性の強いテーマが中心となって、画一的な教化的内容になる傾向が強い。さらに、理科においても他の科目同様、教科内容を学習者の経験と生活に関係づけて学習を進めるためには、指導者の十分な経験と知識の能力開発が不可欠であろう。民衆教育の実践において、指導者である民衆教師は学習者と同等の実践的経験とそれに裏付けられたより深い知識が要求される。

② 民衆教師の養成と質的問題

民衆教師数の推移は、表3に示すとおりである。成人教育において、教師のほとんどがボランティアの民衆教師といってよいだろう。民衆教師の約七〇％は農村で活動している。民衆教師の教育レベルに関しては、一九八三年の資料によると民衆基礎教育のある程度のレベルに合格した民衆教師が二四％、初等教育を受けている者が三七％、初等

表3　1980-87年民衆教育教師数

年　度	成人教育教師数	民衆教育教師数		
		全教師数	指導者	助　手
1978	12	－	－	－
1979／80	6	－	－	－
1980／81	20,130	15,187	15,187	－
1982	17,709	21,607	18,211	3,396
1983	16,730	21,994	18,869	3,125
1984	15,092	20,312	17,203	3,109
1985	11,167	15,976	13,429	2,547
1986	11,326	15,424	13,060	2,364
1987	10,641	14,756	12,709	2,047

出所：Arrien, 1989. p.400

教育を修了している者が十二％、中等教育を受けている者が十八％、中等教育を修了している者が四％、大学教育を受けている者が一％、その他四％となっている。民衆教師の七三％が初等教育もしくはそれ以下のレベルである。[20] 一九八四年の調査では、民衆教師の九％が十五歳以下である。民衆教師のかなりの部分が生徒よりわずかに進んだレベルの教育を受けているに過ぎないし、また必ずしも生徒より経験が豊かであるとは言いえない。

しかし、教育内容と方法論をみても分かるように垂直的知識の伝達を中心とした伝統的教育を受けて来た人々が、民衆教育の教師として適切とは一概には言い切れない面がある。民衆教育を運営するためには、十分な教育を受けていない民衆教師のために民衆教育を実践しながらその方法論を深めるための研修機関と制度が不可欠であろう。しかし、大部分の教師は週末の土曜講座が唯一の学習の場だった。各地区、各地域毎に組織が作られているが、それらは民衆教育の基礎となる参加調査、民衆教育の方法論の研究、民衆教師の研修機関ではない。一部の大学およびＮＧＯの民衆教育機関が教育省の協力機関としてその役割を果たしていたが、その数は限られていた。

民衆教師たちが独自に、社会変革の過程で参加者を政治意識化して行くことは経験の不十分さから考えてかなり困難であろう。教師の質と研修の手薄さから、フレイのいう教科書中心の画一的な銀行型の教育が主流とならざるをえなかった。

③　民衆教育の権威化

一九八五年に政府により決定された民衆教育のフォーマル教育への拡大の背景には、伝統的な教育が旧ソモサ政権の資本主義的イデオロギーを培養して来たという認識があり、革命政府は民衆教育を社会変革の担い手としてフォーマル教育に対立するものとして位置づけた。

サンディニスタ政府は、民衆教育を、革命を担う「新しい人間」を作る教育と位置付け、伝統的フォーマル教育とは別系統の民衆基礎教育を構築した。結果的に、一九八五年までソモサ時代の教育制度に手をつけず、民衆基礎教育だけで完結する成人教育制度を作ったため、フォーマル教育、職業教育と民衆教育が連結していないという事態をまねいた。

民衆教育を強化するという方針とともに、相対的に制度化されたＣＥＤＡに成人教育の比重がおかれてきた。サンディニスタ政府は、成人中等教育を設立し、一九八四年から民衆基礎教育を四レベルから六レベルにした。成人中等教育機関としては、一九八一年に通信教育として出発したフィルモン・リベラ学校があるが、次第にサンディニスタ民衆軍等を対象としたイデオロギー教育を中心としたＦＳＬＮ幹部養成校としての性格が強くなって来た。

民衆基礎教育の参加者をみると、一九八四年では学習者の六九％が十五歳から四四歳であり、二二％が十歳から十四歳の年齢層である。[21] 民衆基礎教育は初等教育の不備を補完する役割を担っていたが、同時に民衆基礎教育の卒業生の受皿としてＣＥＤＡや成人中等教育の制度化が必要となってきた。民衆組織の活動と密接に関係した教育内容のかわりに、ＦＳＬＮの政治教育機関としての要素が入って来た。批判的政治意識を育てる民衆教育の方法論を実践するための人員が質の面からも十分に供給されず、本来民衆組織の活動の中から生まれるべき民衆教育が教育行政の中で成人教育として制度化されることにより、政府によるイデオロギー教化の側面が強調されて来た。

また、民衆組織と民衆基礎教育の関係をみると、ＣＳＴの強力な工場などでは成人教育のクラスに出席することを組合が奨励し、そのための休みが与えられる。八一の国営農場でも各農場が成人教育プログラムをもっている。同様にＡＴＣやＵＮＡＧＨＡは、民衆教育を組織活動にとって重要な活動として、構成員の参加を重視している。全国

一、五〇〇のサンディニスタ防衛委員会（ＣＤＳ）は、各組織ごとに教育担当者を配置している。[23] ＦＳＬＮの下部組織としての性格をもつこれらの組織は、批判的な政治意識の育成が保証されない場合、ＦＳＬＮのイデオロギー教化機関となる危険性をはらんでいた。

しかし、一方で民衆基礎教育の全国画一的な教科書を使用したプログラムとは別に、農業共同組合やＡＭＮＬＡＥの活動の中に、共同組合の運営や女性解放を目的とするプログラムが生み出されて他の民衆組織と連携した活動が行われているのも事実である。ＣＤＳ、ＡＭＮＬＡＥなどの協力で行われた売春婦再教育プログラムは、マナグアの売春婦更正のためのものであったが、売春を行う女性たちを警察がＣＤＳと連携しながら説得してプログラムに参加させ、民衆教育プログラムを通じ識字教育や技術教育を受けながら売春を引き起こす社会構造の問題を考える。さらに、プログラムを修了した女性たちをＡＭＮＬＡＥが支援しながら仕事につかせるという、教育機関だけでは不十分な部分を民衆機関の協力で補完するプログラムが実践された。[23] このような意識化と活動が結びついたプログラムの存在を考慮に入れるならば、ニカラグアの民衆教育がすべてサンディニスタ政府のイデオロギー装置としてしか機能しなかったと考えることは誤りであろう。

むすび

ラテンアメリカの民衆教育は、識字運動あるいは民衆の社会運動の中で培われてきた。ニカラグアの民衆教育は抑圧的ソモサ政権にたいする民衆の抵抗運動の過程で生まれ、草の根民主主義のための民衆の組織化と意識化の方法論を形成して来た。ニカラグア革命によって、民衆教育は体制による社会構造の変革をになう役割を引き受け、従来の

社会運動を基盤とする民衆教育の枠組みから一歩踏み出した新たな展開をみせた。民衆教育は教育を知識の集積ではなく、人間が現実を変革して行く過程そのものであると位置づけた。ここに、社会構造の変革をめざす革命政府の必要とする人間像と民衆教育の方向性の一致があった。対話つまり集団討論による意識化を教育の基礎においた民衆教育は、成人教育のさまざまな分野の民衆組織の活動と結び付いて展開された。しかし、民衆基礎教育の権威化と民衆教育を支える民衆教師の技術的な訓練の不備は、上位下達式のイデオロギー教育の弊害を招いた。民衆教育には、特定政党の下部組織としてではない自律的な民衆組織と政府機関との協力、民衆運動のリーダーとなる民衆教師の養成と民衆教育の技術的側面の充実が不可欠である。ニカラグアの民衆教育の経験は、ラテンアメリカの民衆教育運動に様々な示唆を与えている。

一九九〇年四月の総選挙でやぶれたサンディニスタ政府は、政権を親米チャモロ政権に譲った。チャモロ政権下の教育省は、サンディニスタ政権の民衆教育の影響を払拭しようとやっきになっている。成人教育の分野では、民衆基礎教育が解体され成人基礎教育と名称変更した。民衆教師はボランティア教師となり、かってＦＳＬＮを支えた民衆組織から伝統的カトリック教会がその供給源となった。一九八七年で一四、七五六人いた民衆教師は、一九九一年八月の推計では三、五二三人のボランティア教師に激減している。[24] ＣＥＤＡは、成人教育局の管轄から初等教育に移管された。一九九二年をめどに、成人教育の教材としてサンディニスタのイデオロギー的要素を排除した教科書が作成されつつあるが、教科書では民衆教育の方法論が踏襲されている。これは積極的な評価によるものというより、民衆教育にかわる新たな方法論が見いだせないというのが実情であろう。教育省において、急速にこれまでの成人教育が解体して行く中で、旧政府の成人教育に携わった人々により新たな組織が作られている。

サンディニスタ政権のF・カルデナルをはじめとする前教育省の人々により、NGOとしてINIEP（Instituto Nicaragüense de Investigación y Educación Popular）が設立された。この組織はセントロアメリカナ大学と方法論や教材開発の研究提携を行いながら、民衆運動を組織している。INIEPの提供するプログラムは、民衆教育の過程と結果に関する調査と情報提供、民衆教師、地域、組合のリーダーの養成、識字教育、民衆教育となっている。サンディニスタ政権での経験を基礎に、民衆教育の方法論の調査、研究、民衆教育の人員養成、民衆運動との提携に基づく新たな民衆教育の実践がニカラグアで取り組まれている。政府主導の民衆教育に終止符がうたれた今、ニカラグアの民衆教育の真価が問われようとしている。

註

（1）ユネスコ、「ユネスコ文化統計年鑑」一九八九

（2）Latapí, Pablo y Castillo, Alfonso, "Educación no formal de adultos en América Latina", Educación de Adulto en América Latina, Ediciones de La Flor, Buenos Aires, 1985

（3）Torres, Carlos Alberto, The Politics of Non Formal Education in Latin America, Preager, N.Y., 1990

（4）大串和雄、「ラテンアメリカの新しい社会運動」『アジア経済』第三二号、一九九一、四月、一四－三二頁

（5）Bravo, Miguel Obando, Educación y Dependencia: El caso de Nicaragua, INPRHU, Nicaragua 1977, p.319

（6）ibid. p.158

（7）Arrien, Juan b. y Lazo, Roger Matus, Nicaragua: Diez años de educación en la Revolución, MED,

Managua. 1989. p.89

(8) MED, Nicaragua: triunfo en la alfabetización, San José, 1981

(9) Kolésnikov, Nikolái, Cuba: educación popular y preparación de los cuadros nacionales 1959-1982, Editorial Progreso, Moscú, 1983, p.479

(10) 全国識字運動の農村での学生達の活動に関しては、Sheryl L. Hirshon "AND ALSO THEACH TO READ" Lawrence Hill & Company, Westport, Connecticut, 1983を参照

(11) MED, Estrategia Nacional de Alfabeización en el Marco de la Educación Popular de Adultos, Managaua, 1987

(12) ibid.

(13) UNESCO／CAP, Propuesta de diseños de la Educación Popular Básica de Adultos para el Sector Rural, 1988

(14) 牛田千鶴、「民衆教育と『意識化』をめぐって」東京外国語大学地域研究科修士論文、1989、p.64-66

(15) MED. LENGUAJE primer nivel, 1989および LENGUAGE segundo nivel, 1989

(16) MED, CIENCIAS NATURALES, sexto nivel, 1989

(17) MED, CIENCIAS SOCIALES, quinto nivel, 1989

(18) MED, MATEMATICA, segundo nivel, 1989

組織の協力をあおぎながら製作されている。幾つかの例をあげると

MED, Los Cooperados, 1987

MED, Cooperativa de Créditos y Servicios Georgino Andrade, 1987

MED, Cómo se hacen las sumas y las restas? 1989

MED, Todos contra la diarrea, 1989

MED, Las vacunas defienden nuestra salud, 1989

MED, Las mujer en el campo, 1989

MED, Los campesinos producimos maíz y frijol, 1989

(20) Arrien, op.cit. p.303

(21) ibid. p.540

(22) Arnove, Roberto F., Education and Revolution in Nicaragua, Preager, N.Y., 1986, p.57

(23) Proyecto INSSBI-CAV 1983-1986, Prostitución en Nicaragua: una Experiencia de reeducación, Centro de documentación de la mujer, Managua, 1987

(24) 一九九一年八月現在のMED、成人教育局の調査によれば、ボランティア教師は二、八八八人で調査回収率は、七五%である。この数字から推計すると三、五二三人程度ある。